

ISERROR関数

使い方マスターガイド



※当ガイドに従うことで、法令違反がないことを保証する資料ではありません。
※あくまで参考としてご活用いただくことを想定している資料です。実際の制度内容は国の資料等をご確認ください。

ISERROR関数の「役割」はシンプル

ISERROR関数の「役割」はシンプル

ISERROR関数は、対象が「エラー」であれば TRUE、そうでなければ FALSE を返す、判定専用の関数です。Excel におけるすべてのエラー値（#N/A, #VALUE!, #REF!, #DIV/0!, #NUM!, #NAME?, #NULL!）に対応して、種類を問わず検出します。

=ISERROR(テストの対象)

テストの対象（A1セルの値）	数式 =ISERROR(A1) の結果
100（正常な数値）	FALSE
#N/A（エラー）	TRUE
#DIV/0!（エラー）	TRUE

 **ポイント:** ISERROR関数単体では「エラーを消す(空白にする)」ことはできません。
あくまで「エラーの有無を判定する」のが仕事です。

【比較】ISERROR vs IFERROR vs ISNA

【比較】ISERROR vs IFERROR vs ISNA

似ている3つの関数の使い分けを整理しましょう。現在はIFERRORが主流ですが、用途によってはISERRORが必須になります。

関数	判定するエラー	結果の返し方	おすすめ用途
ISERROR	すべて	TRUE / FALSE	条件付き書式、複雑な分岐処理
IFERROR	すべて	指定した値 (例: 空白)	エラー表示を消したい時（最も一般的）
ISNA	#N/Aのみ	TRUE / FALSE	VLOOKUPで「見つからない時」だけ判定したい時

【実践①】 IF関数と組み合わせて処理を分岐

【実践①】 IF関数と組み合わせて処理を分岐

「エラーだったら空白」にするだけなら IFERROR で十分ですが、「エラーだったら計算式A、エラーじゃなかったら計算式B」のような複雑な処理をさせたい場合は、IF + ISERROR の組み合わせが最強です。

シナリオ： VLOOKUPでエラーが出たら「未登録」、エラーじゃなければ「登録済み」と表示したい。
(VLOOKUPの結果そのものは表示したくない)

数式： =IF(ISERROR(VLOOKUP(A2, D:E, 2, 0)), "未登録", "登録済み")

解説：

- ISERROR(...) でVLOOKUPの結果がエラーかチェック
- エラーなら(TRUE)→ "未登録"
- エラーでなければ(FALSE)→ "登録済み"

【実践②】

条件付き書式で「エラー行」に色を塗る

【実践②】条件付き書式で「エラー行」に色を塗る

これこそが ISERROR関数の真骨頂です。IFERROR関数ではできない、「エラーが含まれるセルや行を自動で塗りつぶす」設定に使用します。

手順:

1. 色を塗りたい範囲を選択
2. [ホーム] > [条件付き書式]の横にある矢印から [ルールの管理] > [新規ルール] を選択
3. [ルールの種類を選んでください]で[数式を使用して、書式設定するセルを決定]を選択
4. 以下の数式を入力し、[書式] ボタンで塗りつぶしの色を設定

数式例: =ISERROR(A1) (※A1は選択範囲の左上のセル)

結果: これで、エラーが発生したセルだけが自動的に赤く塗りつぶされ、膨大なデータの中から修正が必要な箇所を一瞬で見つけられます。

【免責】

※当資料に従うことで、法令違反がないことを保証する資料ではありません。

※あくまで参考としてご活用いただくことを想定している資料です。また当資料は、公開日時点の内容となっております。最新の情報、実際の制度内容は国の資料等をご確認ください。